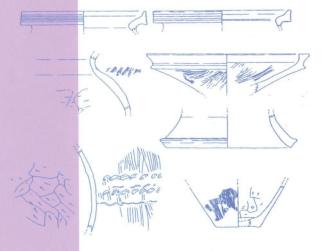
平成9年度 島根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う

小山遺跡





THE EXCAVATION REPORT OF OYAMA SITE

1999.3 出雲市教育委員会

鳥根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書

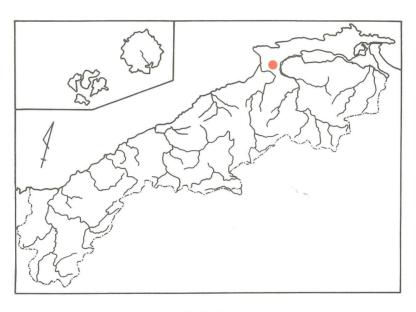
正 誤 表

正

P 7	17行目	第7図	\rightarrow	第6図
	3 2 行目	第7図	→	第6図
P 9	11行目	第7図	\rightarrow	第6図
P 1 1	3 3 行目	時期は7が弥生時代	\rightarrow	時期は弥生時代
P 1 5	下段	造構外遺物	\rightarrow	遺構外遺物
P 1 6	5 行目	返りが付き、	\rightarrow	返りが付くもの、
	11行目	やや丸見を持った	\rightarrow	やや丸みを持った
P 1 8	4 行目	確認れている。	$\frac{1}{2}$	確認されている。
	17行目	こういった現像	→	こういった現象
図版 2	下段	遣 構地空中撮影写直	\rightarrow	遺構空中撮影写真

平成 9 年度島根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う

小山遺跡発掘調査報告書



小山遺跡位置図

1999. 3

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市四絡地区は、矢野遺跡・小山遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発事業増加に伴って、付近の発掘調査も大幅に増え、しだいに古代の四絡地区の様子が明らかになりつつあります。

このたび、島根県立看護短大教員宿舎建設ににあたり、小山遺跡の一部を発掘調査致しました。その結果、弥生時代及び奈良・平安時代の遺構・遺物を検出し、この地域における人々の暮らしを知る貴重な資料を得ることができました。特に弥生時代の溝状遺構は、市内の天神遺跡や正蓮寺周辺遺跡(下古志遺跡)などでも確認されている環濠と類似したものであり、貴重な発見と言えます。

これらの成果が、郷土の歴史をひもとく鍵として、広く活用されることを 期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導ご協力賜りました関係者の皆 様に心からお礼申し上げます。

平成11年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

例 言

- 1. 本書は、島根県立看護短期大学より委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成9年度に実施した小山遺跡発掘調査の報告書である。
- 発掘調査は、下記の期間において実施した。
 平成9年(1997) 7月30日~平成9年(1997) 10月3日
- 3. 発掘調査を行なった地番は次のとおりである。 島根県出雲市小山町648-3
- 4. 調査は次の組織で行なった。

調 査 指 導 岩橋 孝典(島根県教育庁文化財課主事)

調 査 主 体 出雲市教育委員会

事 務 局 後藤 政司(文化振興課長)

調 査 員 藤永 照隆(文化振興課主事)

調 査 補 助 員 石橋 弥生(文化振興課臨時職員)

発掘作業 吾郷 要子、奥田 広信、片山 修、鎌田 静子、坳鎌田 操、

富田 勉、浜村 富江、米山 清司

遺物整理作業等飯國陽子、今岡司郎、鬼村奈津子、三成留美、遠藤恭子

- 5. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
 - SD……溝状遺構 SK……土壙 P……ピット
- 6. 本書で使用した挿図の方位は、調査時の時北であり、レベルは海抜である。
- 7. 本書に報告した資料は、出雲市教育委員会において保管している。
- 8. 本書の執筆、編集は藤永が行なった。

本 文 目 次

は	じ	X)	に			
例			-	言			
目			1	次			
V	ま		کے		め		17
図				版	• • • • •	図版 1 ~図版	页10

挿 図 目 次

第1図	四絡遺跡群遺跡分布図	2
第2図	出雲平野の主要遺跡分布図	3
第3図	遺構配置図 4~	- 5
第4図	調査地周辺実測図	6
第5図	土壙実測図	8
第6図	遺物実測図	9
第7図	弥生時代溝状遺構配置図	10
第8図	SD01土層図	10
第9図	SD02 · SD03 土層図 ······	12
第10図	溝状遺構遺物実測図	13
第11図	遺構外遺物実測図 1	14
第12図	遺構外遺物実測図 2	15
第13図	小山遺跡調査地配置図	17

I. 調査の経緯

1996年(平成8年)9月、島根県立看護短期大学より教職員宿舎建設(増設)予定地における埋蔵文化財の調査について依頼を受けた。当該地一帯は周知の遺跡である小山遺跡の範囲内であり、1994年(平成6年)に行なわれた隣接地発掘調査(一次調査)の結果からも事業地内における埋蔵文化財の存在が確実であった。そのような状況を踏まえて出雲市教育委員会と島根県立看護短期大学で協議を重ね、1997年(平成9年)7月末より発掘調査を実施することで合意した。約2カ月間の現地調査の後、島根県教育委員会との協議の上で工事着手の運びとなった。

Ⅱ. 位置と環境

調査地周辺は矢野遺跡、大塚遺跡、小山遺跡、姫原西遺跡などからなる「四絡遺跡群」と呼称される広範囲の集落遺跡群である。四絡遺跡群の核となる矢野遺跡は縄文時代後・晩期からの遺物も確認される集落であり、矢野第3地点では吉備地方から搬入された弥生時代後期の特殊土器等も発見されている。他の遺跡はこれにやや遅れて弥生時代中期中葉以降に造営が始まる。

今回の調査地は、四絡遺跡群の中の小山遺跡第3地点にあたる。調査地の西側には旧河道が認められ、遺跡はその旧河道東岸に広がる旧自然堤防上の微高地に立地する。小山第3地点では、これまでの調査で弥生時代中期から平安時代に営まれた集落遺跡であることが確認されている他、遺物に墨書土器・ヘラ書き土器があることから『出雲国風土記』記載の「八野郷庁」との関連も注目されている。

縄文時代 縄文時代前期末から中期にかけては縄文海進の影響で出雲平野の大部分が海域であり、集落が本格的に営まれるようになるのは海退の進んだ縄文時代後・晩期頃からであった。主な集落遺跡には、早期末の上長浜貝塚、菱根遺跡、縄文時代後・晩期の三田谷 I 遺跡、原山遺跡などが挙げられる。ほとんどの集落が平野の縁辺部に営まれていたようであるが、平野中心部の矢野遺跡などでも当該期の遺物が少量確認される。

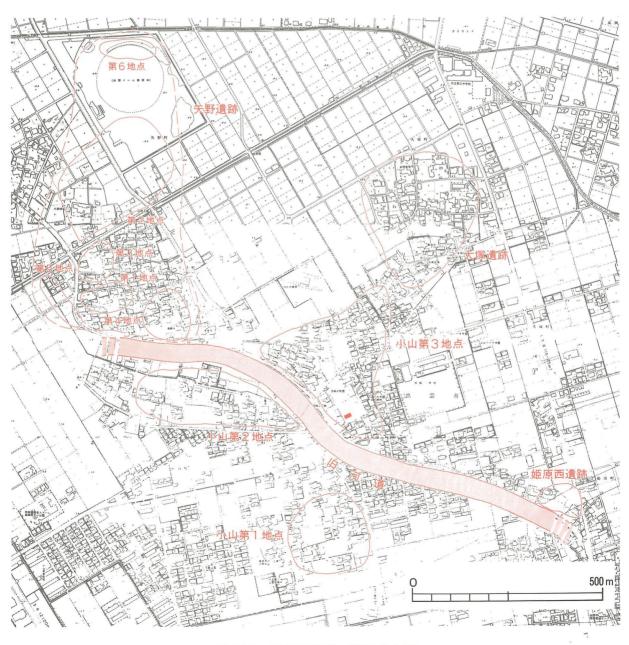
弥生時代 弥生時代前期には縄文時代後・晩期の状況と大きな変化はなかったようであるが、弥生時代中期から後期にかけては矢野遺跡周辺をはじめ、天神遺跡や古志本郷遺跡、正蓮寺周辺遺跡(下古志遺跡)、山持川遺跡など、平野部各地で集落が急増する。この頃までには斐伊川・神門川の沖積作用が進み、平野部各地に人の生活可能な微高地がかなり広がっていたと考えられる。

また、弥生時代後期後半になると、出雲平野を見下ろす西谷丘陵上に四隅突出型墳丘墓6基を含む 西谷墳墓群が築造された。中には長辺40mを越える大形のものも含まれ、各集落を統率する有力首長 がこの頃までに出現していたと考えられる。

古墳時代 弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、矢野遺跡や天神遺跡、古志本郷遺跡など、平野

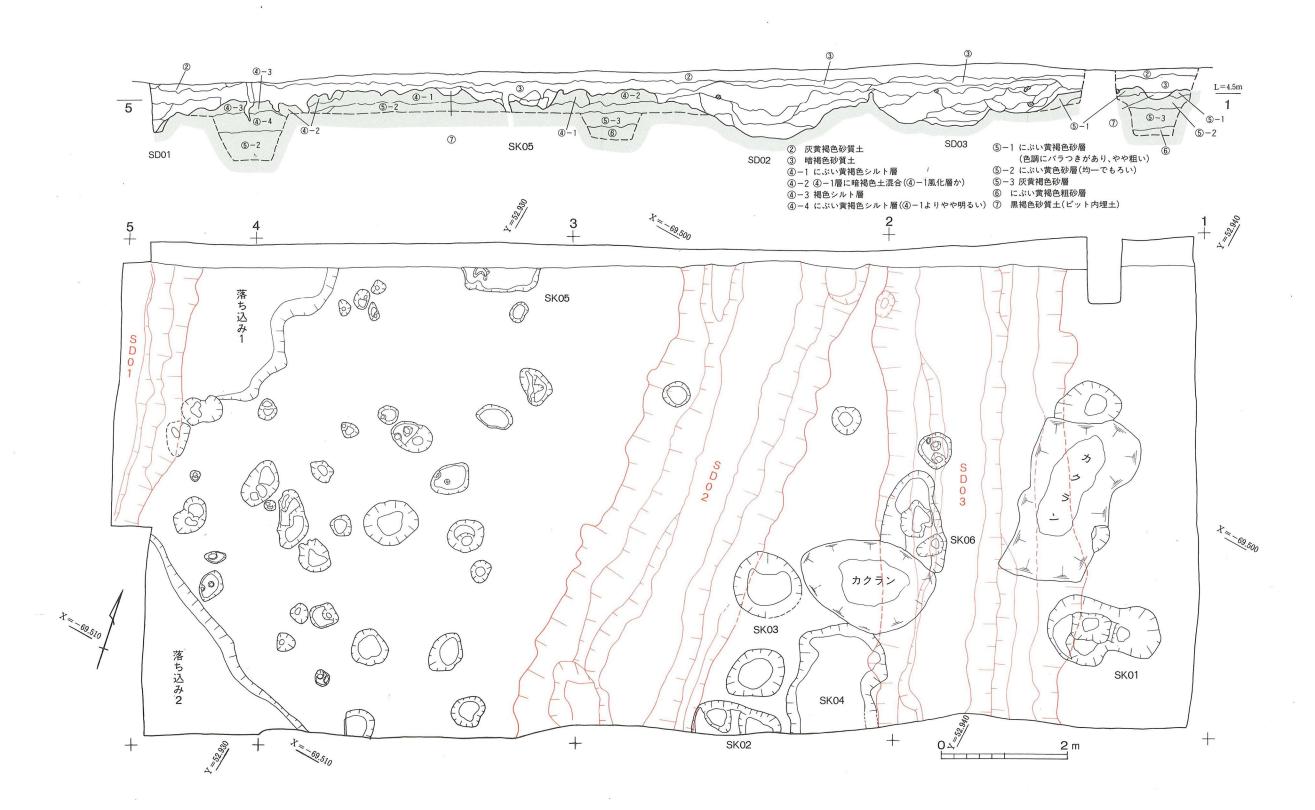
部に営まれた集落の多くが衰退していった。集落衰退の原因は現段階では不明である。当時の権力の象徴であった古墳もこの時期の大形のものはあまり知られていない。古墳時代中・後期になると、低地の集落にも人々が戻り初め、古墳も出雲地方最大の前方後円墳である大念寺古墳(約100m)をはじめ、有力古墳や横穴墓が平野縁辺部に数多く分布するようになった。

律令時代 律令時代には出雲平野は当時西流していた出雲大川(現在の斐伊川)を境に神門郡と出雲郡に行政区画が分かれていた。平野の西には神門水海(現在の神西湖)が、東には入海(現在の宍道湖)が未だ現在より遙に大きく広がっていたようである。当該期には平野部各地で遺跡が確認され、中でも墨書土器などの文字資料を出土する古志本郷遺跡、天神遺跡、小山遺跡、三田谷 I 遺跡などが注目される。古志本郷遺跡は神門郡家跡に比定される。また、この時期になると神門寺境内廃寺などの氏寺が建造されるとともに小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓、光明寺 3 号墓などの初期火葬墓があり、いちはやく仏教文化が取り入れられていたことが窺える。



第1図 四絡遺跡群 遺跡分布図

出雲平野の主要遺跡分布図 第2図



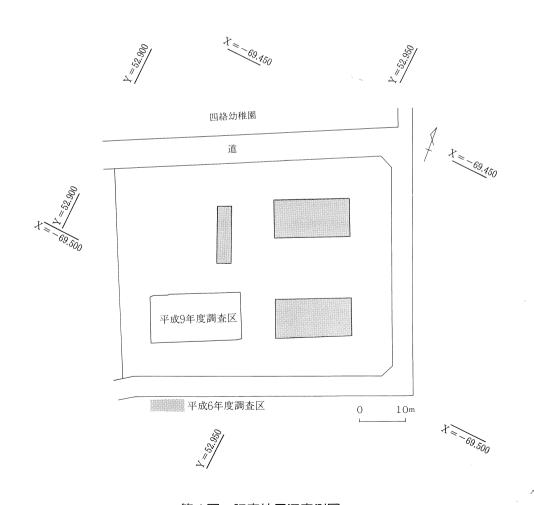
第3図 遺 構 配 置 図

Ⅲ.調査の概要

今回の調査は、作業の省略化をするため重機による表土掘削を行ない、その後手掘りによって徐々に掘削しながら遺構・遺物の検出を行なった。調査面積は約 $10m \times$ 約20mの約200m、検出遺構面の面積は約 $8m \times$ 約17m約135mである。

<土層堆積状況> 層序は、基本的に上層から表土、灰黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、黄褐色シルト層・にぶい黄褐色砂層、黄褐色粗砂層の順になっている。ただし、黄褐色シルト層は調査地の西側のみで確認され、東側にはない。暗褐色砂質土が遺物包含層となっており、黄褐色シルト層及びにぶい黄褐色砂層が遺構面となっている。これより下層においては遺構・遺物共に全く確認されていない。 〈遺 構〉 標高約4.5mまで掘り下げたところで、遺構面に達した。遺構には南北に走る3条の大溝(SD01~03)、多数の土壙(SK01~06)、ピットなどを確認している。大溝はいずれも弥生時代のもので、土壙・ピットは大部分が奈良・平安期のものであると考えられる。

<造物> 遺物は弥生時代後期の土器、奈良・平安期の須恵器、土師器、鉄器など、コンテナ2箱分が出土した。量的には弥生土器は少なく、奈良・平安期の土器が多い。



第4図 調査地周辺実測図

Ⅳ. 遺構と遺物

1. 土壙・ピット

調査区西側ピット群(第3図)

調査区の西方、SD01とSD02の間には大小計35個のピットが密集している。列状に並ぶものは確認できなかった。深さは深いもので40cm程度、埋土は基本的に黒褐色砂質土で、土層から柱の痕跡等が確認されるものも皆無である。

落ち込み1 (第3図)

調査区の北西角に確認される地形の落ち込みである。落ち込みの高低差は大きいところで約10~15 cm程度となっている。地面の凹凸が著しく、人工的に整地したような痕跡は見られない。遺構面上面の封土も包含層 3 層と同様である。

落ち込み2 (第3図)

調査区南西角に確認される地形の落ち込みで、落ち込み1と同様の特徴を示す。

SK01(第5図)

東西幅約1.8m、南北最大幅約1.1m、深さ約40cmの落ち込み状遺構。2つの落ち込みが重なって検出されたものである。東側のやや小さめの落ち込みを、西側の大きめの落ち込みが切っていることが土層より確認される。SD03を切って造られている。

遺物は埋土内より土師器片が数点出土している(第7図1~3)。いずれも東側の古い落ち込みの上層にあたる1層から出土したものである。 $1\sim2$ は土師器坏である。平底で直線的もしくはやや外反ぎみに開く口縁部を持つ。1では内外面に丹塗りの痕跡が確認され、底部にはケズリ後底部押圧技法が確認される。3は土師器坏もしくは皿の底部である。平底で、内外面丹塗りである。時期は8世紀束~9世紀頃と考えられる。

SK02 (第5図)

東西幅約1.4m、南北幅50cm以上、深さ約40cmの落ち込み状遺構。南側は調査区外に出ているが、 楕円形の平面形を呈すると思われる。遺構の上面より土師器細片が出土している。

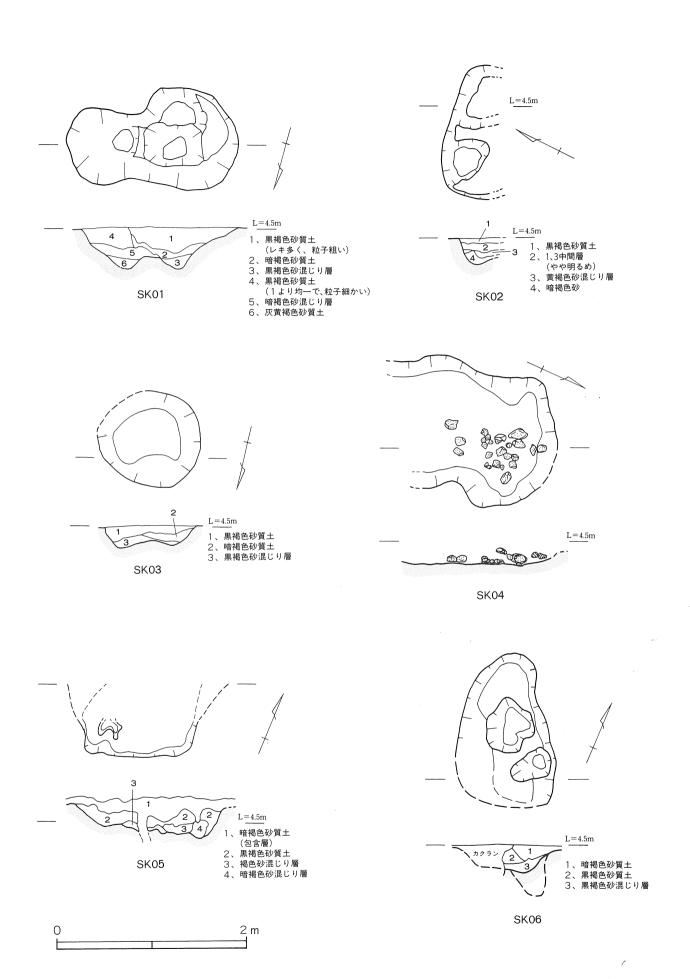
SK03 (第5図)

円形の平面形を呈する、径約1.1m、深さ約25cmの落ち込み状遺構。 SD02を切って造られている。

SK04 (第5図)

東西幅約1.3m、南北幅1.6m以上、深さ15cm~35cmの不整形な形状をした落ち込み状遺構。落ち込みの中には多数の軽石が入っていた。石は遺構底面から埋土上面まで存在しており、埋める際に埋土と一緒に混入したものと推測される。SD03を切って造られている。

遺物は埋土上面より須恵器、土師器が確認されている(第7図4~7)。これらの遺物は原位置を保って出土したものとは考え難いものの、埋土直上で4のような大きめの破片も出土しており、本来



第5図 土壙実測図

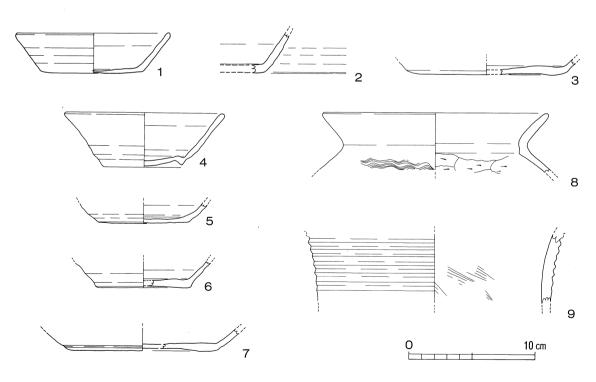
土壙上に置かれていた遺物である可能性がある。 $4 \sim 6$ は土師器坏である。いずれも内外面丹塗りである。 4 は底部外縁を高台状につまみ出すもので、口縁は直線的もしくはやや外反ぎみに立ち上がる。 5 、 6 は底部の破片で、いずれも平底である。底部押圧技法が施される。 7 は須恵器皿の破片である。底部に回転糸切りの跡が残る。遺物の時期は 8 世紀末~ 9 世紀頃であろう。

SK05 (第5図)

東西幅約1.7m、南北幅75cm以上、深さ約30cmの落ち込み状遺構。北側は調査区外に出ているが、 検出部分では台形状である。

SK06 (第5図)

楕円形状を呈する、東西幅約1 m、南北幅1.6m以上、深さ約30cm(一部深い部分では約55cm)の落ち込み状遺構。南側は近代の攪乱により破壊されている。SD03を切って造られている。



1~3:SKO1 4~7:SKO4上面 8:SKO6上面 9:SKO6

第6図 遺物実測図

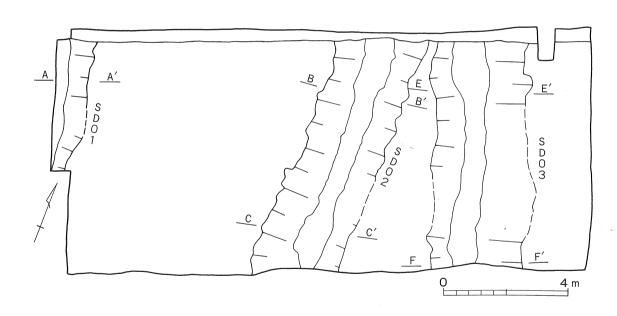
2. 溝 状 遺 構

調査区内には弥生時代の溝状遺構が合計 3 状確認されている。いずれも幅 2 m以上で、深さは $60\sim70$ cm程度のものである。平成 6 年度の調査では。SD0 2、SD0 3 の延長線上北側約 5 mを含む場所を今回の調査区の東方を中心に調査されているが(第 4 図)、同様な溝状遺構は検出されておらず、SD0 2、SD0 3 の 2 状の溝は調査区外北側で北西方向に屈曲しているものと推測される。それぞれの溝状遺構の概要は以下のとおりである。

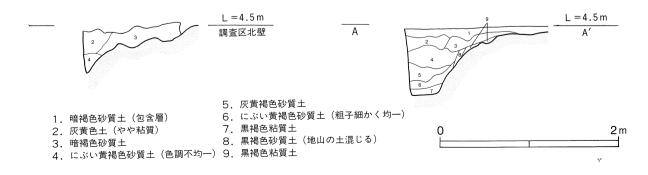
SD01

SD01は調査区西端で部分的に検出された溝状遺構である。検出長約4.5m、幅1.2m以上、深さ約70cmを計る。溝の西肩の状況は調査区外であるため確認できていないが、幅2m以上はあるであろうと推測される。底面は幅35cm以上の平坦面を有し、70°前後の傾斜で立ち上がっている。明確な掘り返し等の痕跡は確認できなかったが、2層下面、5層下面などは堀り返しラインの可能性がある。

遺物は8もしくは9層より弥生土器甕口縁の小片が1点(第10図-1)出土している。溝掘削後比較的早い段階に付近から流れ込んできたものと推測される。複合口縁を呈する甕で、口縁下段の突出



第7図 弥生時代溝状遺構配置図



第8図 SD01土層図

は下方に伸び、外面には7条の擬凹線が施される。胴部内面にはケズリが施され、頸部内面にはヘラミガキが施されている。遺物の時期は弥生時代後期前半頃で、出雲地方の弥生後期の土器編年草田2期にあたるものである。

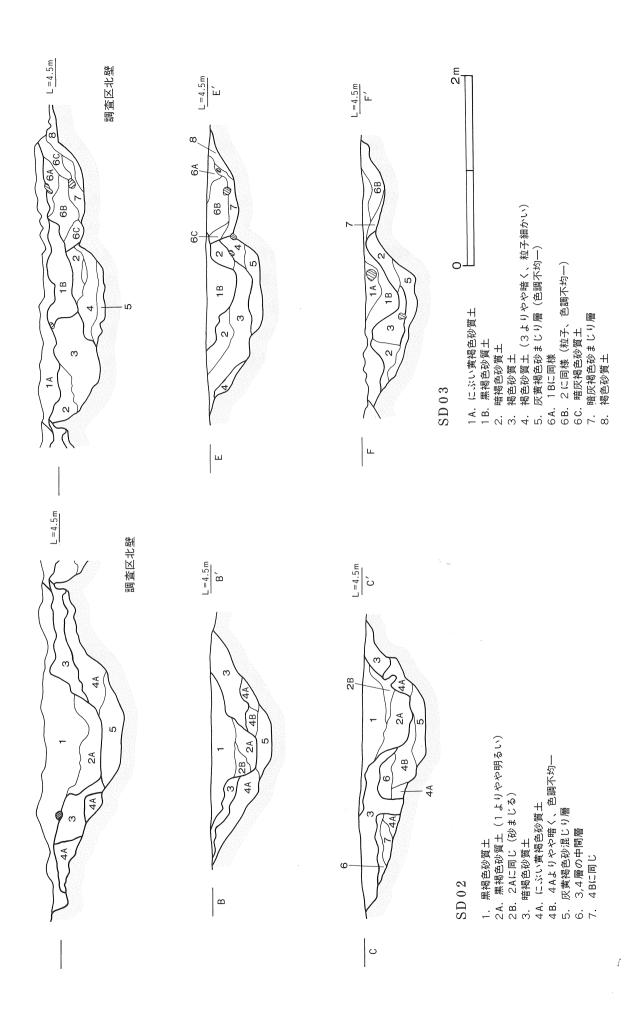
SD02

SD02は調査区の中央をほぼ南北にSD01と平行に走る溝状遺構である。検出長約8m、幅2. 4 m~3 m、深さ約70cmを計る。底面には幅60cm程度の平坦面(部分的には最大約1 m幅になる部分もある)を有し、約40°の傾斜で立ち上がっている。最低1回以上の掘り返しの痕跡が確認されており、1、2層は最終掘り返し後の堆積土であると考えられる。最終掘り返しの溝は幅約1.6m、深さ約50cmを計るもので、当初に掘られたSD02よりも若干北西-南東方向に走っていたようである。また、3層下面についても整った断面形ではないが掘り返しラインであると思われる。3層下面の掘り返しラインはSD03の埋土を切っていることが調査区北壁セクションにより確認される。

遺物は1、2層(SD02上層)及び3、4層(SD02下層)から弥生土器他小片が数点出土しているが(第 $10-2\sim10$)、最下層である5層からは出土しなかった。また、確認された遺物はかなり風化を受けた小片ばかりであることからも、これらは付近から流れ込んだものであると考えられる。同一層の遺物の時期についても新旧混在しているため堆積土ごとの時期判断は難しい。

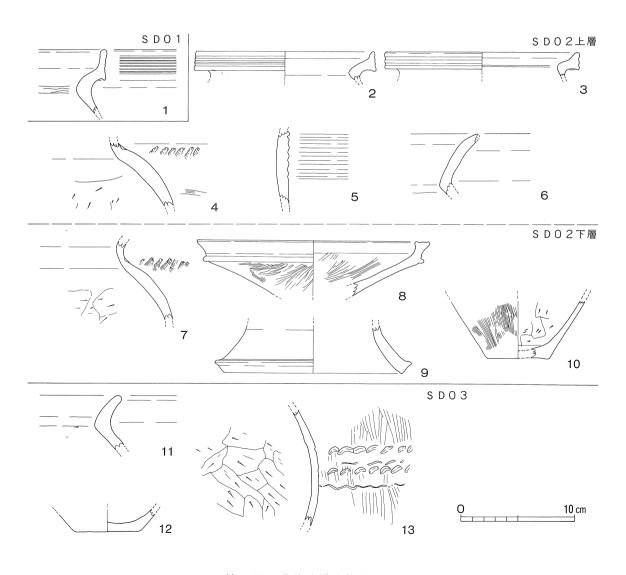
 $2\sim6$ はSD 0 2上層出土遺物である。 2、3 は複合口縁を呈する甕口縁部である。短小でやや厚手の口縁に $2\sim3$ 状の凹線が施される。体部内面にはヘラケズリが施されている。 4 は甕の頸部から体部にかけての破片である。頸部付近に刷毛原体によると思われる列点紋が施される。風化が著しく明瞭でないが、体部内面のケズリは頸部まで施されていたようである。 5 は大型壺の頸部と考えられるもので、外面に 7 本以上の凹線が施される。 6 は単純口縁の土師器甕口縁部片で、最端部が欠損している。直線的に開き、端部付近でやや外反する形状である。上層遺物の時期は $2\sim3$ が弥生時代後期前葉(草田 1 期)、 5 が弥生時代中期後葉(松本第IV様式)、 6 が奈良~平安時代頃のものと考えられる。 6 についてはセクションベルトにほぼ接した形で出土したものであり、他層からの混入品である可能性はほとんど無い。また、包含層以下から奈良~平安期より新しい遺物が出土していないことから 1、 2 層の掘り返しは奈良~平安時代に行なわれたものと考えられよう。

 $7 \sim 10$ はSD02下層出土遺物である。 $7 \sim 9$ が3層、10が4層から出土している。7は甕の頸部から体部にかけての破片である。SD02上層出土の4と同様の特徴を示す。8は高坏坏部の破片である。直線的に広がる坏部から稜をもって上方に立ち上がる口縁部は、端部で内外面に拡張している。端部には2条の凹線紋が施される。坏部内外面には $0 \neq 0$ 0分割には $0 \neq 0$ 0分割には $0 \neq 0$ 0分割を含むた。 $0 \neq 0$ 0分割を表えられる。 $0 \neq 0$ 0分割を表えられる。 $0 \neq 0$ 0分割を表えられる。 $0 \neq 0$ 0分割を表えられる。 $0 \neq 0$ 0のである。端部は肥厚し、 $0 \neq 0$ 0分割を表えられる。 $0 \neq 0$ 0のである。端部は肥厚し、 $0 \neq 0$ 0のである。 $0 \neq 0$ 0のである。



SD03

SDの 3 はSDの 2 の東を北北東-南南西方向に走る溝条遺構である。検出長約7.5m、幅約 3 m、深さ約60cmを計る。数度の掘り返しによって本来の断面形及び幅は明瞭でないが、セクションから復元すると、本来幅 2 m前後、底部平坦面は本来 $40\sim70$ cm程度、傾斜角 45° 前後の溝であったようである。外幅の割には底部平坦面が広く、逆台形状の断面形になるものと考えられる。掘り返しラインは 1 層下面、3 層下面、7 ・8 層下面が比較的明瞭であるが、この他にも数回の掘り返しがあるようである。 3 層下面の掘り返しラインはSDの 2 の 3 層下面掘り返しラインによって切られている。 1 層下面の掘り返しは溝のほぼ中央を走り、幅約 1 m、深さ約30cmを計る。 3 層下面の掘り返しは溝のやや西よりを走り、復元幅 2 m前後、深さ約45cmを計る。 7 ・8 層下面の掘り返しは溝の東肩付近を走り、幅約 1 m、深さ約30cmを計る。いずれも本来の溝とほぼ同一方向に走っているようである。遺物は 3 層より弥生土器片が数点出土している(第10図 $11\sim13$)。いずれも小片で風化著しく、付近から流れ込んできたものと考えられる。SD03 の掘削直後の土層から出土した遺物でもないためこ



第10図 溝状遺構遺物実測図

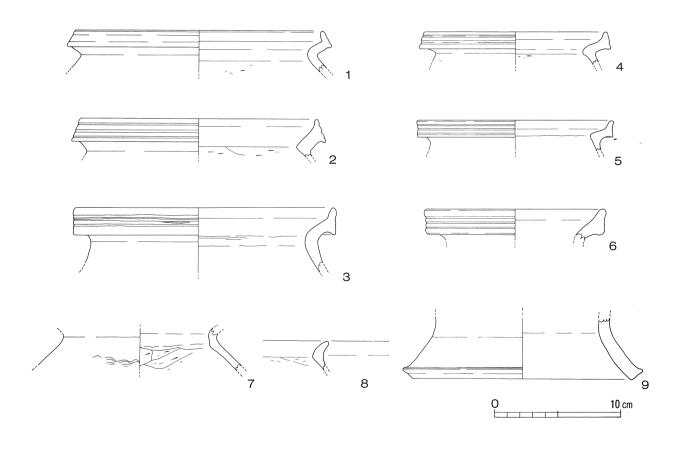
れらはSD03の掘削時期を正確に示すものではない。

11は単純口縁壺もしくは甕の口縁部から頸部にかけての破片である。体部内面には頸部以下ケズリが施されている。12は甕底部の破片である。風化著しいが内面にケズリの痕跡が確認される。13は甕体部の破片である。外面は荒いハケメ調整が施され、2状の蛇行した沈線の間と上に逆U字状の連続刺突紋が施される。内面はヘラケズリが施されている。遺物の時期は弥生時代後期前葉前後であろうか。SD03の掘削時期については判断が難しいが、遺構周辺の出土遺物の上限とSD03埋土を切っている SD0203層出土遺物から判断すると、弥生時代中期後葉~後期前葉の範疇で捕えられるものであろう。

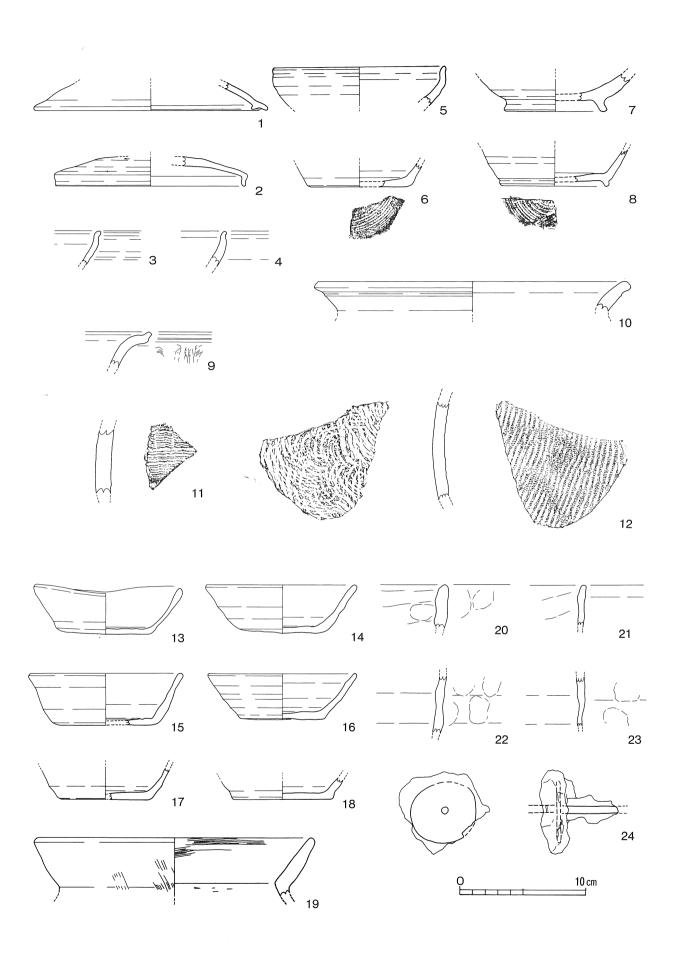
3. 遺構外遺物

第11図、第12図は遺構外出土遺物である。

第11図は弥生土器である。 1、 2、 4 は口縁が短小で内傾する甕で、 1 は風化のため不明瞭だが、 2、 4 では 2 ~ 3 条の凹線が明瞭に観察される。体部内面には頸部以下ケズリが施される。 3、 5 、 6 は口縁が短小で直立する甕である。いずれも 3 条の凹線が施され、 3、 5 には体部内面にケズリが確認され、 3 では頸部内面にミガキも確認される。 7 は甕の頸部付近の破片である。肩部には 4 条以上の波状紋が施され、体部内面はケズリが施される。 5 K 1 1 1 1 K 1 K 1 C 1 K 1 K 1 C 1 K



第11図 遺構外遺物実測図1



第12図 造構外遺物実測図2

と同一個体である可能性もある。8は単純口縁壺等の口縁部である。体部内面にケズリが施されている。9は高坏脚部かと考えられるものである。端部は肥厚し、ナデ調整が施される。内外面共に風化著しい。SD02下層出土品(第10図-9)と同様の特徴である。

第12図は奈良~平安時代の遺物である。

 $1 \sim 12$ は須恵器である。 1、 2 は蓋で、 1 は偏平な形状で短い返りが付き、 2 は返りが無く、口縁端が屈曲して下垂するものである。 2 の天井部にはケズリが施される。 $3 \sim 8$ は坏である。 $3 \sim 5$ は内湾する口縁が端部で外方に屈曲する。 $6 \sim 8$ は坏底部の破片である。 6、 8 では直線的に立ち上がり、底部に糸切りが見られる。 8 は低い高台が付く。 7 は内湾して立ち上がり、ハの字状のやや高い高台が付く。 9 は壺等の口縁かと思われるもので、端部を上方に摘み出し、端部外面は面を持って沈線状に窪む。外面には粗雑な波状紋が施される。 10、 11 は甕・大型壺の口縁部の破片である。 10 は短い口縁がやや外反して立ち上がり、端部上面はやや丸見を持った面をつくる。端部外面には 1 本の沈線が施される。 11 は外面に波状紋が施される。 12 は甕体部の破片である。 外面には平行の、内面には青海波紋の叩き痕が見られる。

 $13\sim19$ は土師器である。 $1\sim18$ は丹塗りの坏で、平底の底部から直線的に開く口縁部を持つ。これらはいずれもSK04、SK03周辺から出土している。19は甕である。やや内湾する口縁は端部を、丸くおさめる。口縁内面には一部ハケメ調整が施され、体部内面にはケズリが施される。

20~23は製塩土器の破片である。六連式系統の本来砲弾形のものであったと推定される。布目痕は確認されない。

24は鉄製品である。直径約5 cm厚さ約3 mmの円盤状のものに直径5 mm程度の棒が差し込んである。 紡錘車であろうか。

V. ま と め

今回の調査は、小山遺跡第3地点の西端近くに当たる地点の調査である。小山遺跡ではこれまで、 平成6年度に島根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う第1次調査(小山第3地点)が、平成8年 度に市道渡橋平野線改良に伴う調査(小山第2地点)がすでに行なわれている。

平成6年度調査では、弥生時代の遺構は確認されていないが、奈良~平安時代の溝・土壙・ピット等が確認されており、墨書土器も出土するなど、貴重な成果が得られている。風土記記載の神門郡八野郷庁の関連施設である可能性が考えられる。平成8年度調査では、近世以降の攪乱を大きく受けていたようであるが、小山第2地点と第3地点の間を流れる旧河道の他、弥生時代の溝が2条検出されている。

弥生時代の遺構について、これらの調査と今回の調査をまとめたものが第13図である。いずれの調査においても弥生時代の確実な遺構は溝状遺構のみであり、住居や墓などは確認されていない。

(1) 古代の遺構と遺物

古代の遺構として、遺物から確認されるものはSK01、SK04である。また、SD02の最終

掘り返し溝も古代のものであることが確認された。その他のピット、土壙についてもそのほとんどがこの時期のものである可能性が強いが、遺構からの遺物が少ないため断定はできない。遺構外の遺物も弥生時代の溝状遺構周辺以外では7世紀末~9世紀の遺物が中心として出土している。平成6年度調査の遺構と関連するものと考えられる。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として考えられるものはいずれも溝状遺構のSD01・02・03である。弥生時代の遺物が出土した遺構には他にもSK06があるが、これについては出土状況から、直接遺構の時期に伴うものではないと思われる。

それぞれ溝の掘削時期はSD01が草田2期以前(後期前葉?)、SD02が草田1期(後期前葉)、SD03がSD02とほぼ同時期か、それよりも若干古



第13図 小山遺跡調査地配置図(S=1/5000)

い時期のものと考えられる。

このような溝を配置する集落は、弥生時代中期中葉~古墳時代初頭の出雲平野においては一般的なものであったようであり、下古志遺跡、古志本郷遺跡、天神遺跡でも集落に溝が多重に配置される状況が確認れている。これらの溝の機能としては、集落の区画、用排水路などの可能性が考えられており、一般的な環濠のような、外敵からの防御としての機能は現在までのところ確認されていない。

今回の調査区の西方では、当時徐々に湿地化しつつあった川が流れていたことが確認されている。 今回検出した溝状遺構はいずれもこの川に沿うように走っている。平成8年度調査で確認された弥生 時代中期の溝状遺構も川に平行して、または川に流れ込むように走っており、水利との関連性を窺わ せる。

(3) 小山遺跡の時期

今回の調査地で確認された遺物の時期は弥生時代中期後葉~古墳時代初頭頃と7世紀末~9世紀前半である。各時期の間、古墳時代の大部分が空白期となっている。平成6年度、8年度の調査においても若干弥生時代中期中葉と古墳時代後期の遺物が確認されるものの、やはり古墳時代の大部分は空白期となっており、今回の調査地と基本的には同様な状況である。

出雲平野における集落遺跡のほとんどは弥生時代中期中葉から後期初頭までに急激に広がり、古墳時代に入る頃に一旦衰退する現象が見られるが、小山遺跡においても同様な状況であることが確認された。こういった現像の要因としては、従来より大規模な水害等の可能性も考えられてきたが、遺跡の調査からはそのような痕跡は確認されておらず、何か他の要因があったものと考えたほうが良いであろう。この要因の解明がこれからの出雲平野集落研究における課題の一つである。

参考文献

<遺 物>

- ・松本岩雄 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年
- 鹿島町教育委員会 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』 5 南講武草田遺跡 1992年
- 島根県教育委員会 『高広遺跡発掘調査報告書』 1984年
- ・武田恭彰 「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」『古代吉備』第14集 1992年
- 近藤義郎編 『日本製塩土器研究』 1994年

<四絡遺跡群>

- ・出雲考古学研究会 『古代の出雲を考える』 5 出雲平野の集落遺跡Ⅱ 1986年
- 田中義昭他
- 「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書』 1989年
- 出雲市教育委員会 『四絡地区遺跡発掘調査報告書』 1992年
- ・出雲市教育委員会 『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡発掘調査報告書』 1998年

・出雲市教育委員会 「第2章 1.集落の急増 四絡遺跡群」『遺跡が語る古代の出雲』 1997年

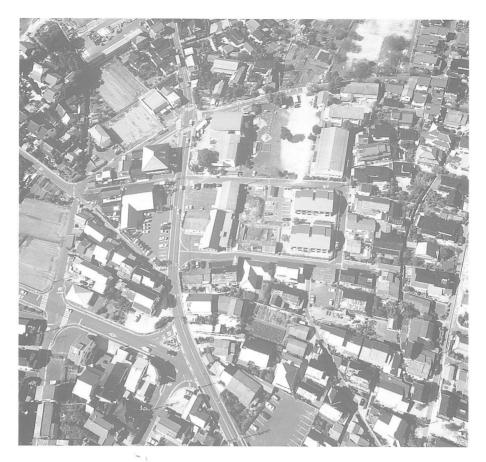
<出雲平野の遺跡>

- ・出雲市教育委員会 『出雲市遺跡地図』 1993年
- ・出雲市教育委員会 『遺跡が語る古代の出雲』 1997年
- ・出雲市教育委員会 『市道本郷新宮線改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』 1998年
- 出雲市教育委員会 『天神遺跡第7次発掘調査報告書』 1996年

図 版



四絡地区空中撮影写真(S53)



調査地周辺空中撮影写真



遺構地空中撮影写真(左からSD01.02.03)



SD01 完掘状況 (北より)



SD01 土層堆積状況 (北より)

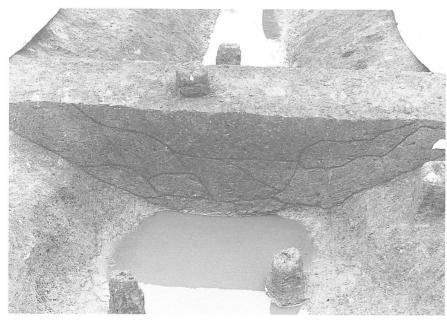


SD01 遺物出土状況 (東より)

図版 4



SD02 完掘状況 (北より)



SD02 土層堆積状況 (北より)



SD02 遺物出土状況 (北より)



SD03 完掘状況 (北より)

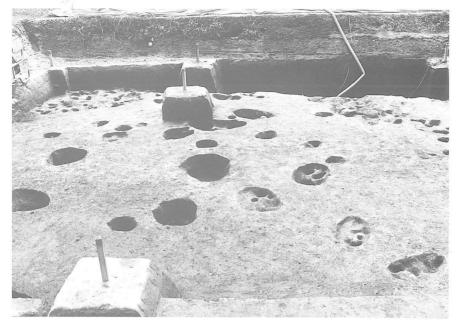


SD03 土層堆積状況 (調査区北壁)



SD03 遺物出土状況 (北より)

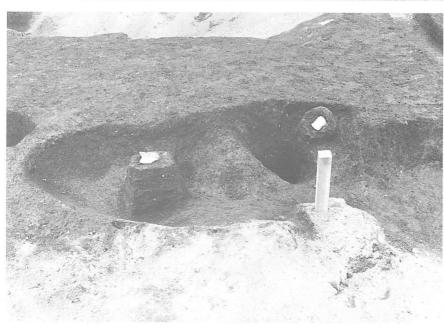
図版 6



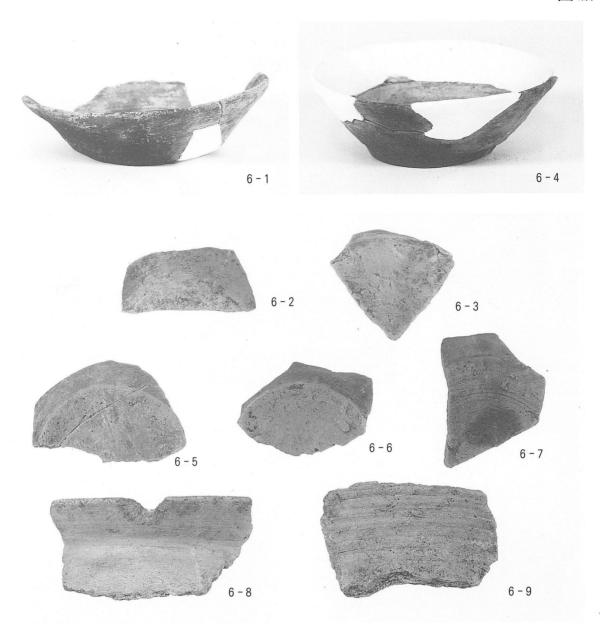
調査区西側ピット群 (東より)



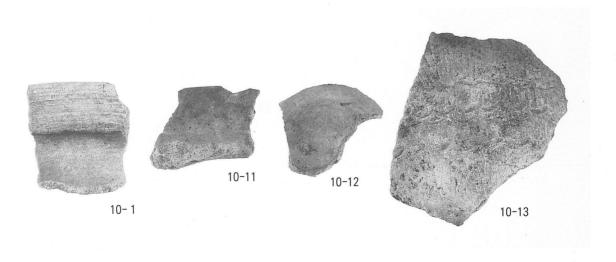
SK04 (南より)



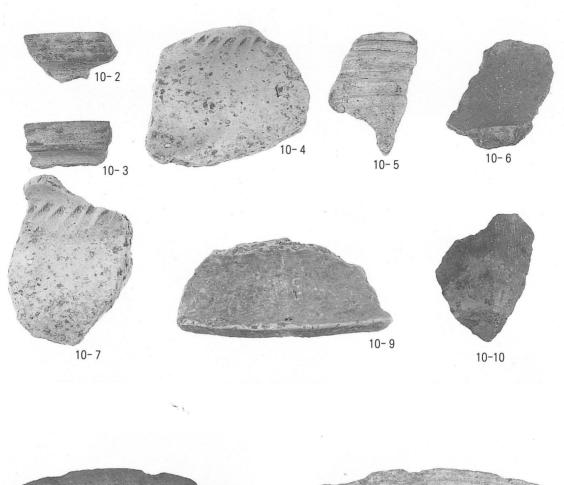
SK06 (西より)

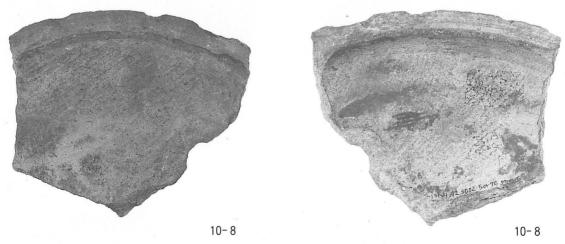


SK01.04.06 出土遺物

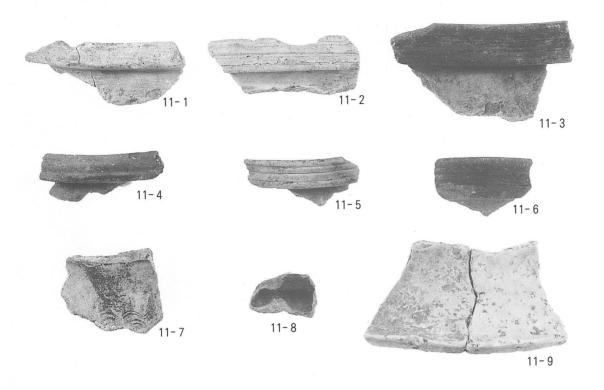


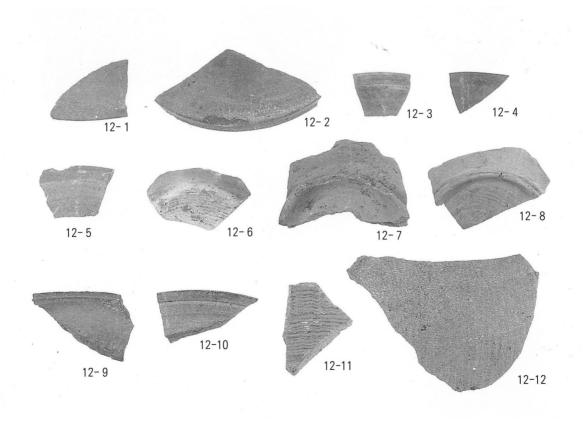
SD01.03 出土遺物



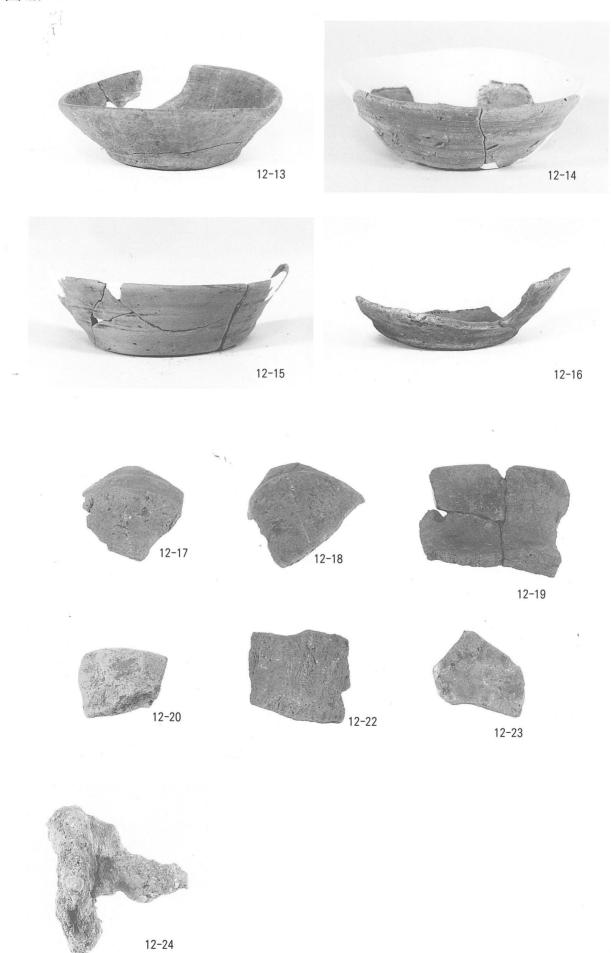


SD02 出土遺物





遺構外遺物



遺構外遺物

平成9年度島根県立看護短期大学教職員宿舎建設に伴う

小山遺跡発掘調査報告書

平成11年(1999) 3 月発行

編集·発行 出雲市教育委員会 出雲市今市町109番1

印刷・製本 有限会社 ナガサコ印刷

出雲市下横町350番地